

大学新入生のサークル加入についての得失の予期

臺 利 夫

(人間科学部)

The Prospects of Cost and Reward regarding Joining a Campus Group for College Freshmen

Toshio Utena

(Faculty of Human Science)

要 旨

大学新入生のサークル加入希望者(当該時点では未加入者)はサークルに対して高い評価をして楽観的であるという質問調査結果を得た。未加入理由別下位群間で評点に差異が認められたが、全体的に入学早々に加入した者よりは評点が低い。これは人間関係へのより消極的な構えに拠るとみられた。また、6カ月後の再調査によると、なお未加入のままの者がとくに低評点であった。他方、少数ながらこの時点ですでに退部していた者は、入学早々の加入者並みの高評点であった。

大学の新生の多くは入学後間もなく学内のサークルやクラブや研究会など(以下、サークルと略記)に加入する。彼等は加入前に加入を予期するサークルに対して(+)の評価をしているであろう。これは上級生が勧誘に際して誇大な宣伝を行う点も一因であるが、入学以前に培われた彼等自身の体験からくる構えに因る点もあるだろう(Levine, J. M. et al. 1994)。以前に属したグループで快的な体験をしていれば大学のグループにも(+)評価をするだろうし、以前に(-)体験が多ければ、大学のグループにも(-)評価をして加入しないことになるだろう。だが現実には(+)に評価しながら結局は加入しなかったり、加入しても僅かな期間で退部する者もある。これらは入学後に知った現実のサークル活動の条件に基づくこともあるが、加入時における構えにも関係すると考えられる。過

度に楽観的であったり、評価が低いのに加入する場合である。こうした構えには、集団への従属とか、対人関係への好き嫌いの度合いが関わっているだろう。

Brinthaup, T. M. (1991)は、新生に加入を希望するグループについて予期される肯定・否定の諸項目をあげさせ、10点法で評価させた。その結果、加入希望者 prospective memberは、おしなべて(+)評価が(-)評価を上回って優位であり、加入を希望するサークルへの参加に対して楽観的であった。

本研究者は1995年度に、サークルへの加入に当たっては、どのような事項を評価すべきかを2、3年生にたずねて必要な項目を設定した。これは加入に関して肯定的に評価される項目12、否定的に評価される項目11個となった。次にこの項目に基づいて、人間科学部新生に対し、各項目について「少しそうだ」

から「非常にそうだ」までの10点法で尺度化したものを与えて予期評価をさせた。肯定的諸項目の評価点平均と否定的諸項目の評価点平均を比較し、どちらかの優位によって(+)優位または(-)優位とした。ただし、調査実施期は6月で新生の多くは既になんらかのサークルに加入しており(144名[80%])、未加入者は少なかった(34名[20%])。

予備調査での未加入者に注目すると、その中のサークル加入希望者は(+)優位であるが、加入を希望しない者も含めた全体の個人別平均得点では(-)優位者の割合が大きく、かつ人間関係項目(HR)に否定的である。他方、既加入者は(+)優位でHRに肯定的だが、一部の(-)優位者はむしろ非人間関係項目(nHR)の否定が大きいことが示唆された。つまり、加入者と未加入者では(-)優位の意味が異なるようである。だが、予備調査は入学当初の実施ではなく、質問もある項目への肯定と否定が対比関係になっていなかった。また統計的検定もおこなってなかった。これらの点を検討して、再度調査することが必要とみられた。

目 的

入学当初(4月初旬の時点)において、新生でサークルへ加入を希望する者はどのくらいの割合になるか。また彼等はこれらサークルに対する期待として、どの程度(+)評価をしているか。また調査紙の質問における集団所属を含む人間関係項目得点(得点で以下、HRと略記)と非人間関係項目得点(以下、nHRと略記)の間でなんらかの差があるか[4月時点1回目調査]。さらに、これらの希望者の中で6カ月後でもなお未加入の者や退部者(中断者)はどの程度あるか。これらの残留者は4月時点でHR・nHRに関して、なんらかの特性を示したか[10月時点2回目調査]などの諸点を明らかにする。

方 法

1 回目調査：1996年4月11日実施

被調査者は文教大学人間科学部1年生195名であり、この中で未加入者は167名(86%)、既加入者は28名で(14%)である。

2 回目調査：1996年10月24日実施

被調査者は1回目と同じである。

1回目の質問紙は'95年度のものをも参考にして作成した。まず、サークル加入・未加入の実態、未加入理由別の群別け(a.入ろうと思ってる。b.特定のサークルに入ろう思っているが、この大学には無い。c.どれかのサークルに入りたいがどれにしたらよいか決まらない。d.なにかのサークルに入りたいのだが、自分がどんなことをやりたいのかわからない。e.サークルに関心がない。入ることを考えたことがない)を行ない、次に加入を予期するサークルへの評価を求めた。

各項目ごとに、記載の内容に関して「その通りである」と「まったく無い」を両極(5点～1点)として尺度化したものを実施した。項目数は21である[資料参照]。この中で7項目はHR、11項目はnHR、その他の3項目は知的な諸事項として特定した。

2回目の質問紙では、サークル加入の実態についての質問に中途退部「入っていたが止めた」を挿入した。サークルへの評価の質問は行わなかった。本研究はもっぱら入学当初の評価を焦点にした。なお、加入希望者(159名)は未加入者中の95.2%であるので、まとめて未加入者群として(加入に消極的なe群(8名)も含めて)検討することで、まず全体的な意味を把握するようにした。

結 果

1. 加入者群・未加入者群の集団への評価結果の因子分析

1回目の調査結果を因子分析(バリマックス法による直交回転)したところ、3因子に分かれた。因子1は楽しさを軸とした(+)

評価、因子2は辛さを軸とした(-)評価、因子3は(+)でも(-)でもない教養に関するものであった。ここではもっぱら因子1と因子2に注目して検討をすすめた。因子1(+)の負荷量の優越するのは10項目(以下、因子1項目と略称)と因子2(-)の優越するのは8項目(以下、因子2項目と略称)、また因子3の優越するのは3項目であった。これは表1に示したごとくである。

表1 評価結果の因子分析表

	因子1	因子2	因子3
1. 友達や仲間	0.5929	-0.2049	-0.0664
2. 身体の健康	0.5022	0.0644	-0.0197
4. 協調性の発展	0.7031	-0.0119	-0.3180
5. 心の健康に	0.6673	-0.0685	-0.2988
6. 人間関係の楽しさ	0.7304	-0.1784	-0.1925
8. 集団活動の楽しさ	0.7259	-0.1908	-0.1873
16. ストレスの発散	0.4799	-0.317	0.0278
17. 責任感の増大	0.3350	0.1411	-0.1939
19. 趣味の増大	0.4067	0.0923	-0.3431
21. 自信や充実感の増大	0.6085	-0.1173	-0.1840
7. 身体の疲れ	0.2209	0.4121	0.1603
11. 時間的問題	-0.0313	0.5464	0.1232
12. 費用の問題	-0.0557	0.4064	-0.0078
13. 技能的問題	-0.0792	0.5142	-0.1050
14. 心の疲れ	-0.1892	0.6560	-0.0007
15. やりたいことがやれぬ	-0.1667	0.5222	0.1431
18. 対人関係に気を使う	-0.0941	0.6794	0.0535
20. 集団活動の辛さ	-0.3428	0.6035	-0.0138
3. 知識の発展	0.2044	-0.0830	-0.8073
9. 知識の増大	0.1825	-0.0153	-0.8434
10. 自分への気づき	0.3711	0.1042	-0.4945
因子負荷量の2乗和	3.9443	2.7071	2.1404
寄与率(%)	18.7824	12.8908	10.1923

2. 加入者と未加入者の因子得点の比較

文教大学人間科学部新入生の入学時のサークルへの態度は、既述のように4月時点の未加入者群のほとんどが、未加入理由は様々だが、基本的には加入を希望していた。まず、未加入者群の加入への予期評価を因子得点によって、この時点で(入学と同時に)すでに

加入していた者と比べてみた。加入の有無別に因子1(+)得点の平均と因子2(-)得点の平均を比較した。

表2-1 因子1および因子2の因子得点の加入者群・未加入者群の比較

	加入者	人数	未加入者	人数	t	p値	判定
因子1	0.468	28	-0.078	167	2.88	0.00	**
因子2	-0.084	28	0.014	167	-0.41	0.68	-

表2-2 加入者群および未加入者群における因子1・因子2の因子得点の比較

	人数	因子1	因子2	t	p値	判定
加入者	28	0.468	-0.084	1.94	0.06	(*)
未加入者	167	-0.078	0.014	-0.85	0.40	-

[**1%以下で有意 *5%以下で有意 (*)10%以下有意傾向 -有意差なし]

表2-1によると、因子1では加入者対未加入者は0.468:-0.078(有意差あり)で加入者がより高く、因子2では-0.084:0.014で有意差がない。他方、表2-2をみると、加入者では因子1対因子2は0.468:-0.084であって有意差傾向をみるが、未加入者では有意差はない。要するに、加入者群は未加入者群に比べてサークルへの予期評価が一層高く、より楽観的である。

3. HR対nHRについて、加入者群と未加入者群の得点比較

未加入者が未加入であることの動機として加入者よりは人間関係項目HR(資料の質問No. 1, 4, 6, 8, 17, 18, 20)、非人間関係項目nHR(質問No. 2, 5, 7, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 19, 21)のいずれか、またはいずれについても評価が低いことはないだろうか。

これを簡便に明らかにするため、加入者と未加入者のHR項目およびnHR項目の評価粗点平均を比較した。比較の都合のため、因子2優越項目(因子2の因子得点が因子1の因子得点を上回る諸項目)の評価粗点を逆に(1点を5点として換算)して全HR項目およ

び全 nHR 項目の評価粗点の平均値（以下、評点と略記）をとって比較した。（+）項目で最小の1点は必ずしも（-）項目で最大の5点と等しくないが、概括的な比較のために、このようにして一定の方向性を与えて均した尺度を用いた。

表3-1 HR項目とnHR項目について加入者群・未加入者群の評点比較

	加入者	s ²	未加入者	s ²	差			
人数	28		167					
HR	3.94	0.31	3.68	0.27	0.26	t=2.31	p(0.03)	*
nHR	3.44	0.20	3.26	0.21	0.19	t=1.93	p(0.06)	(*)

表3-2 加入者群と未加入者群についてHR項目・nHRの評点比較

	HR	s ²	nHR	s ²	差			
加入者	3.94	0.31	3.44	0.20	0.50	t=3.71	p(0.00)	**
未加入者	3.68	0.27	3.26	0.21	0.42	t=7.78	p(0.00)	**

表3-1によると、HR項目における加入者対未加入者は3.94：3.68、またnHR項目における加入者対未加入者は3.44：3.26で、加入者の評点が未加入者のそれを上回る傾向がある。表3-2によると加入者・未加入者のいずれにおいてもHR項目がnHR項目の評点を上回る（3.94：3.44および3.68：3.26）。

4. HR対nHRについて、未加入者各下位群の評点比較

未加入者の未加入理由別各下位群において、HRとnHRの評点で差があるかどうかを検討した。

表4-1 HR対nHRについて未加入者下位群の比較

下位群別	a	b	c	d	e
人数	73	9	69	8	8
HR	3.75	3.67	3.69	3.50	3.05
nHR	3.32	3.30	3.27	2.93	2.93
差	0.43	0.37	0.42	0.57	0.12
t	6.06	1.69	4.77	2.13	0.56
p値	0.000	0.12	0.000	0.05	0.59
判定	**	-	**	(*)	-

表4-2 分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
A.未加入理由	5.5105	4	1.3776	3.79**
被験者	58.9570	162	0.3639	
B.人間関係	4.6273	1	4.6273	53.62**
A×B	0.6749	4	0.1687	1.96ns
被験者×B	13.9804	162	0.0863	
全体	83.7501	333		**p<.01

表4-3 未加入者下位群間の多重比較

	a	b	c	d	e
件数	26	26	26	26	26
調和平均	3.54	3.48	3.48	3.21	2.99
a=b-		a=c-	a=d-	a>e*	
		b=c-	b=d-	b>e*	
			c=d-	c>e*	
				d=e-	

表4-1によれば、a、c、dのいずれにおいてもHR評点とnHR評点の間には有意または有意傾向の差が認められるが、b群とe群では差が認められなかった。ただしb群での差は有意ではないが傾向差とされる10%に近い。また、未加入理由の要因と人間関係の要因の2要因：5×2水準（1要因繰り返しあり）の分散分析によっても（表4-2参照）、2要因間に有意差を認めた。

つぎに、HR対nHR関係はさておいて、群間の評点の差を多重比較によって検討してみる。表4-3をみると、a、b、cのいずれもが互いに差がない。それらはeとは差があるがdとは差が認められない。dとeの間では差がないけれども、その間にもなんらかの違いは考えられる。このように下位群の間でも評価の仕方に差があることがわかる。

表4-1、表4-3をあわせてみながら、e群におけるHRとnHRの差が0.12で他の群の差より一層小さい点を顧みると、見かけ上、eの特性はHRとnHRの差がほとんどないことにあるようだが、さらに検討すべきだろう。

5. 未加入者の人間関係への消極性

未加入者群でもHR項目評点はnHR項目評点を上回るが(表3参照)、加入者群よりもHRもnHRも共に評点は低かった。加入者群対未加入者群の関係を念頭におきながら、さらに未加入者のHR評点の特性を捉えよう。未加入者のa群は未加入者の中では最も高評点である。もしa群が加入者の評点に等しいか近いならば、未加入者の低評点はb群以下の下位群の得点に負うであろう。またより低ければ、全体として低く抑えられていることになる。

加入者HR得点に対して未加入者のa群のHR評点、加入者のnHR評点に対して未加入者a群のnHRの評点を比較する。未加入者における双方の評点のとり方に差があるかどうかを検討した。

表5 HRとnHRについて加入者と未加入者a群の比較

	加入者群	未加入者a群	差	t	p値
人数	28	73			
HR	3.94	3.75	0.19	1.59	0.12
nHR	3.44	3.32	0.12	1.21	0.23

表5によると、nHRについて、加入者と未加入者a群の差(p値0.23)は有意でないし、HRにおける差(p値0.12)についても有意でない。しかし、後者では有意傾向といえる値に近く、HRについてはa群でも加入者群よりは人間関係へのいくらか消極的構えがうかがえる。今後の検討をまたねばならないだろう。

6. 未加入者のHR評点を低めている全体的抑制傾向

未加入者ではa群のみならず他の下位群についても、評点への抑制力がかかっていて、全体として評点が低下していると考えられるが、この傾向はHRではnHRよりもより大きいのではないか。その点を確かめるために両評点の下位群間の分散を比較した。

表6 未加入者群a~eのHR評点とnHR評点の分散の比較

	HR (a~e)	nHR (a~e)
人数	167	167
得点	3.68	3.26
S D	0.52	0.46
分散	0.27	0.21

F=129 10%>p>5% 有意傾向

表6によると分散はHR(0.27)の方がnHR(0.21)より大きく、加入を消極的にするHRでの圧力はa群からe群まで、おしなべてはたらいっていると推測される。

7. 6カ月後も未加入の者の4月時点での特性

1) 10月時点未加入者を除く4月時点未加入者との比較

新入学時点の未加入者のほとんどは、間もなく何等かのサークルに加入してゆく。だが6カ月経った10月になってもなお未加入の者も存在する。この人たちは4月時点の調査段階でなんらかの特性を示していただろうか。彼等と4月時点未加入者中から彼等を除いた部分をHRとnHRの両評点について比較した。

表7 10月時点未加入者のHR・nHR評点の特性

	人数	HR得点	nHR得点
10月未加入群	23	3.47	3.11
4月未加入-10月未加入群	144	3.71	3.28
差		0.24	0.17
t		2.15	2.09
p値		0.04	0.04
		*	*

表7によれば、10月時点のHR、nHRはそれぞれ3.47、3.11であるのに対して4月時点の残余の未加入者は3.71、3.28であり、いずれについても10月時点での未加入者は評点がより低いといえる。すなわち6カ月経ってもなお未加入の者は、すでに4月時点において他の未加入者よりもHRでもnHRでも評点が一層低い人であった。

2) 未加入理由別下位群における10月時点未加入者の分類

10月時点未加入者23名中5名はe群（集団加入に無関心の者）8名中から出ている。だがd群「なにかのグループに入りたいのだが、自分がどんなことをやりたいのかわからない」8名は、全員が10月時点ではなにかの集団に加入している。そこで10月時点未加入者がどの下位群から多く出ているかを全体として見てみる。

表8 4月未加入者中その後に加の者となお未加入の者の下位群別（10月調査）

	a	b	c	d	e
その後の加入者	69	8	56	8	3
なお未加入の者	4	1	13	0	5
計(4月未加入者)	73	9	69	8	8

表8によると、e群で10月時点未加入者が目立つほか、c群で13名の者が未加入のままである。つまり「どれかのグループに入りたいがどれにしてよいか決まらない」者に10月時点未加入者が比較的多いように見える。

まず、 χ^2 検定を行うと有意であり($p < .01$)、行列間に差異があるとみられる。しかしどのセルに期待以上の度数が集まっているか捉えられないので残差分析を行って、表9を得た。

表9 表8に基づく残差分析表

	a	b	c	d	e
その後の加入者	2.75**	0.19	-1.57	1.17	-4.11**
なお未加入の者	-2.78**	-0.22	1.59	-1.16	4.12**

表9によると、0.1%以下で有意なのはaとeだが、相対的にいってaは、4月以降の加入者の顕著に多いことを示すのに対して、eでは、“なお未加入の者”が顕著に多いことが示されている。他の群はいずれも有意でないが、cの“なお未加入の者”(1.59)についてみると、有意傾向とされる($P < .10$)値が1.64であるので、有意傾向に近い数値が示されている。つまりこれらの者は4月時点の加入希望者中のc群から比較的多く現れているよう

に思われる。さらに多数のデータによって確かめなければならないだろう。

10. 10月時点での退部者の特性

10月時点の退部者調査では、4月調査時に既に加わっていて退部した者2名(28名中)とその時点では未加入でその後に加わしながら中途退部した者3名:a群2名、b群1名(167名中)が認められた。経路の違いによって、心情は若干異なるけれども退部ということで同じとみてまとめた5名が、HRとnHRでどのような特性を4月時点で示していたかを検討した(表10参照)。

表10 退部者のHR・nHR評点

	10月退部者		加入者	
人数	5	s^2	28	s^2
HR平均	4.08	0.18	3.94	0.31
nHR "	3.58	0.06	3.44	0.20

退部者は5名で僅少例であるし、それぞれ異なる群からの者なので加入者(28名)の評点平均と統計的に比較することはできない。だが退部者の平均評点がHRで4.08($s^2=0.18$)、nHRが3.58($s^2=0.06$)ということは、加入者におけるHR平均評点が3.94($s^2=0.31$)、nHRが3.44($s^2=0.20$)であることを顧みると、10月退部者が総じて、nHRでもHRでも加入者に似た高評点者であったことが想像される。

要約と考察

大学新入生でクラブやサークルなどのグループに加入することを望む者のほとんどはサークルを高く評価しており、サークルの活動に楽観的であったとした先行研究がある。文教大学新入生はどのような構えで学内のグループに応じて、加入・未加入に至るであろうか。新入生のサークルへの予期評価を質問紙によって調査した(調査対象者は人間科学部生に限定された)。1回目の調査時点は1996年4月

11日であった。また、入学後6カ月を経過した10月24日に2回目の調査を行い、この時点でなお未加入の者や早くも退部した者は4月時点でいかなる評価を行っていたかを顧みた。

1) 調査結果を因子分析して楽しさ(+)と辛さ(-)および知性(±)の3因子を認めた。本調査ではとくに因子1(+)と因子2(-)に注目して検討した。当該質問項目について、加入者群では(+)因子得点が(-)因子得点を上回り、また(+)因子得点で未加入者群を上回ったから、4月早々に加入する者がサークルへの期待がより高く、未加入ながら期待を寄せる者を超えることが明らかになった。

2) サークルへの加入に関わる要因として人間関係に対する肯定的ないし否定的構えが推測される。この点についてHR(人間関係項目)評点・nHR(非人間関係項目)評点を見ると、加入者群も未加入者群もHRがnHRよりも高い。すなわちサークルへの肯定的評価は人間関係へのより高い評価によると推測される。だがどちらの評点に関しても加入者群が未加入者群を上回っている。入学早々に現実に加入した者では加入希望者よりもとくに強いサークルへの肯定的期待感をもっているのである。

3) 未加入者群では未加入理由別下位群間に評点の差が認められる。e群は加入に消極的な意志を明示しているのでとくに評点が低く、希望者とはいえないが、dのeに対する差も認められない。

4) a群(ストレートな加入希望者)も加入群の評点に比べて低いが、その差はとくにHRで現れている可能性があるように見える。これは未加入者群の人間関係への相対的な消極性を示唆している。HR評点の抑制傾向は未加入者群全体(a群からe群まで)にわたっている。下位群間の分散を見ると、nHRに比してHRの方がより大きいのである。

5) 入学後6カ月を経た10月時点でもなお未加

入の者がいるが、入学時点でHR評点・nHR評点のいずれでも彼等を除く他の未加入者群よりも低い。これは質問への回答では加入希望と記しながらもサークルへの評価がより低かったことを意味している。彼等が未加入者群中のどの下位群から出ているかをみると、e群(8名)から5名出ているほか、c群(どれにしたらよいか決まらない)からの者がより多いようにみえる。この群の態度が他者志向的である点と関わりがあるかもしれない。自分自身の未分化意識から未加入だったd群(8名)の全員が当該時点では加入しているのと同対照的である。

6) 10月時点で既に退部した者の4月時点での特徴は、粗点で見ると限りであるが、HR・nHRを問わず加入者並みに高い平均得点である。これは過大な期待をもって加入したが実際の体験で挫折したことを示唆する。

以上を総括する。本研究でも、先行研究の示すように4月時点での加入希望者がサークルに対して比較的高い評価を行っており、楽観的なのは一応認められた。だが既に入学早々に加入した者よりは評価点が低いこと、人間関係項目と非人間関係項目の粗点平均を見比べると、未加入理由別下位群間で評点に差があり、加入希望者にも種々の群が含まれることが明らかになった。また、彼等における加入者と比べた場合の相対的低評点は人間関係へのより消極的な構えと捉えとみられた。さらに、入学6カ月後の再調査によると、なお未加入のままの者はとくに低評点であった。他方、少数ながらこの時点で早くも退部していた者は、人間関係・非人間関係項目の双方で逆に相当な高評点である。彼等は未加入者中のいぜんたる未加入者とは、当該時点では同様に加入していぬ状態であるとしても、構えが異なっている。

なお、本研究による1995年度の予備的研究で見られた、未加入者の(-)優位者はHRにより否定的という傾向は、部分的に今回の

研究との類似を示唆するが他の部分の相違点もある。調査法・評価法・調査実施時期の違いが関連するところが大きいと思われる。

今後の課題として、本研究はもっぱら入学当初の4月時点の評価点に拠っているので、6カ月以降の行動や構えについても、その時点でのグループへの評価－意識調査を併せて行うべきであろう。また、e群のような集団加入に消極的な者でありながら継続的に加入している者の動機や条件についても探索したい。さらに、高校時代の体験との関連も調査することが望ましい。とくに例数の上で一層大きな群をとりあげる必要がある。

[本研究は多くの方のご支援を受けた。とくに

人間科学部・丹治哲雄教授からは種々の御教示をいただいた。またデータの統計的処理には大学院生の西川尚子さんに助力を願った。感謝します。]

引用文献

Brinthaupt, T. M. et al., 'Sources of Optimism among Prospective Group Members'. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17-1, 1991, pp.36-43

Levine, J. M. and Moreland, R. L., 'Group Socialization: Theory and Research'. *European Review of Social Psychology*, 5, 1994, pp.305-336

[資料]

サークルに入った人はこれからそのサークルで予想される経験について、入りたいがまだ入ってない人や、入る気持のない人は、もし入るとすれば経験すると予想されることについて質問します。以下を読んで当てはまる番号に○をつけてください。

- 1 良い友達や仲間ができるだろう…5. たくさんできるだろう 4. かなりできるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかできないだろう 1. まったくできないだろう
- 2 身体の健康にプラスになることが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 3 知識の発展が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 4 協調性の発展が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 5 心の健康にプラスになることが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 6 人間関係の楽しさが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 7 身体が疲れることだ…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 8 集団活動の楽しさが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 9 知識の増大が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 10 自分への気づきが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 11 時間をとられることについて…5. 非常に気になるだろう 4. かなり気になるだろう 3. なんともしえない 2. ほとんど気にならないだろう 1. まったく気にならないだろう
- 12 費用がかかることについて…5. 非常に気になるだろう 4. かなり気になるだろう 3. なんともしえない 2. ほとんど気にならないだろう 1. まったく気にならないだろう
- 13 技能が下手なことについて…5. 非常に気になるだろう 4. かなり気になるだろう 3. なんともしえない 2. ほとんど気にならないだろう 1. まったく気にならないだろう
- 14 心が疲れることは…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 15 やりたいことがやれないということは…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 16 ストレスの発散が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 17 責任感の増大が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 18 対人関係に気を使うことは…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 19 趣味の増大が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 20 集団活動のつらさが…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう
- 21 自信や充実感の増大が…5. 大いにあるだろう 4. かなりあるだろう 3. なんともしえない 2. 少ししかないだろう 1. まったくないだろう